近江の古瓦 Ⅶ 大津 1

大津地方の１として述べる瓦の出土遺跡は真野から滋賀里までの地域で、真野廃寺・衣川廃寺・坂本廃寺・崇福寺の諸寺院跡がこの地域内にあります。このうち衣川廃寺と崇福寺（長尾瓦窯）には瓦窯が伴ないますが、この瓦窯はその寺の瓦を焼くためのもので、その寺に使用されている瓦が出土しています。したがって、瓦窯出土として別に述べることはせず、寺院跡出土瓦と一括して考えることとします。また、この地域内に穴太廃寺がありますが、これは現在なお調査中のため、その出土瓦については、この「近江の古瓦」の最後に述べる予定である全県的な追加の中でとり上げることとして、今回は割愛いたします。

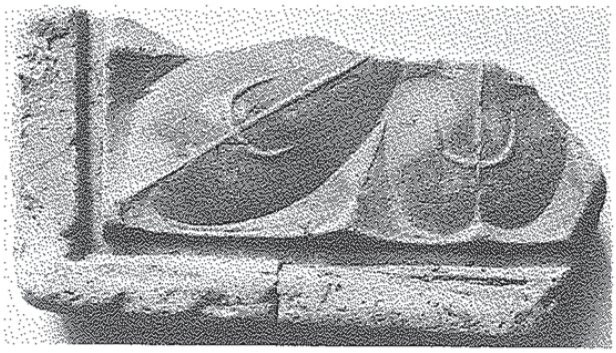
真野廃寺はあまり多くのことが知られておらず、瓦も写真等で知られるだけで、その実物は現存しておりません。これは湖西線堅田駅の西方、真野の中村にある寺院跡です。このあたりに堅田平地の条里方向とは異なる東西の道路や、それに直交する畦畔が認められ、これが古代寺院の名残であろうと考えられています。瓦は単弁系と複弁系の軒丸瓦が各１種知られているだけで、軒平瓦は発見されていません。単弁系のものは、弁は輪郭線でえがかれ、その中に大ぶりの子葉が作られています。あるいは、素弁を輪郭線がとりまいているとした方が適切かもしれませんが、単なる輪郭でなく、先端部で弁の形を作り出しているので、一応これを弁の形と考えておきます。間弁は珠点であらわしています。外縁は欠落しているため、その状況は全然わかりません。中房の蓮子は１＋６計７個です。複弁系のものは、外縁部分の剝落が多く、写真では正確なことは申せませんが、あるいは素文の平縁であるかもしれません。中房も一部が残っているだけで、その詳細は不明です。単弁系のものに比し、その直径は大きいと思われます。

真野廃寺出土瓦　　結城実誠氏写真

衣川廃寺（出土瓦写真１～７）は堅田の衣川にあり、湖西線の工事に伴う事前の調査で発見された遺跡で、現在国の史跡に指定されています。その出土瓦は、軒丸瓦については多くの種類が認められますが、軒平瓦は四重弧文の小破片（７）が１個発見されているだけです。ここでは瓦塔破片（本シリーズ15「近江の古瓦」Ⅰ参照）や隅木先瓦も発見されています。軒丸瓦は素弁のものが４種、単弁のものが１種、それに他にあまり類をみない変わったものが１種あります。まず素弁のものについて説明しましょう。一は１＋４の蓮子をもつ非常に小さい中房の周囲に、Ｔ字状の８個の間弁が８葉の素弁を分けているものです。弁には稜線が通っています（１）。次に、やはり弁央に稜線をもつ８弁の間に比較的大

財団法人　滋賀県文化財保護協会

きな間弁を入れ、中房も前者に比し大きいものでありますが、中房の部分は一部しか残っていないので、蓮子の数は不明です(５)。素弁系の三は、弁数は８葉で、中房には１＋６＋６計13個の蓮子があります(２)。これとよく似たもので、蓮子が１＋４？と思われるものもあります(３)。これらの素弁系軒丸瓦の縁はすべて素文の平縁です。単弁のものは、いわゆる山田寺式に属するもので、弁数は８葉、中房には１＋６の蓮子があり、外縁には重圏文が施されています(４)。衣川廃寺では、恐らくこの山田寺式の単弁８葉の軒丸瓦と四重弧文の軒平瓦が対をなして主流となるのでしょう。なお、前述のごとくここでは他に類例を見ない軒丸瓦が発見されています。これは弁の形は単弁系のもののようですが、弁は先のふくらんだ稜線様のもので二つに分けられ、それぞれの区画内に子葉が各１個ずつ作られています。間弁も主弁と同様先のとがった形をしており、花弁が重なったように作られているものです。中房には１＋８＋12の蓮子が方形状に並んでいます。主弁と間弁の間には小さな三角形状のものがつくられ、縁は素文の平縁です(６)。隅木先瓦と思われる１個は素文系で、鉤状の枝をもつ稜線が細線で画かれています。

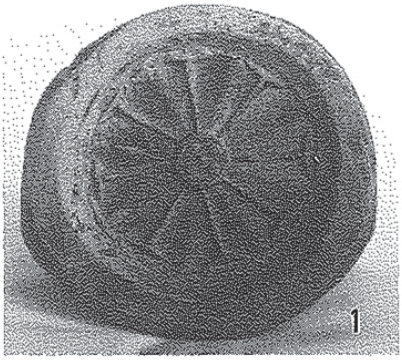


衣川廃寺出土　隅木先瓦

坂本廃寺（出土瓦写真８～11）は湖西線叡山駅の近くで最近発見された寺院跡ですが、調査地は伽藍の中心部を外れていたようです。出土瓦はいわゆる川原寺式の複弁８葉軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が主流で、ただ一片素弁８葉と思われる小片がまじっています。この素弁８葉のものは素文の平縁で、中房部分は不明です(11)。複弁８葉軒丸瓦は、蓮子１＋４＋８の比較的大ぶりな中房があり、外縁には鋸歯文が施されています(８)。これに対する軒平瓦は四重弧文ですが、弧の形に２種類あるようです。一は弧の彫りが深く、その断面は半円形に近いもので(９)、他は断面コの字状になるものです(10)。

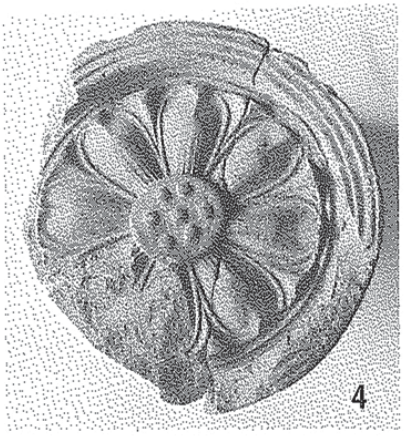
崇福寺跡（出土瓦写真12～35）では、前述の諸寺院跡と異なり、平安時代の瓦も数多く出土しています。したがってその出土瓦の種類も非常に多くなります。ただこれらの瓦の記述の前に次の事柄を注意しなければなりません。これは滋賀県史蹟調査報告第２冊で、肥後和男氏がすでに指摘しておられるところですが、扶桑略記所載の崇福寺に関する記事によれば、その堂塔をすべて桧皮葺（一部の雑屋は板葺）としていることです。これとこの地における瓦の出土とをどう結びつけるのか疑問が残るのです。しかし、ここではとりあえず報告書に載せられている瓦を中心にその瓦類について述べることにしましょう。

崇福寺は天智天皇創建の寺院として古来著名な寺院です。昭和に入って肥後和男・柴田實両氏の調査が行なわれ、その全容がほぼ明らかになりました。特に三重塔の地中深くに据えられた心礎から、銅・銀・金三重の函に入れられた舎利及び多くの荘厳具が発見されたことは有名です。これは現在国宝に指定されています。崇福寺の位置は滋賀里の西方山中にあり、南北に並ぶ三つの尾根を利用してそこに堂塔があったことが、現在も残っている礎石でわかります。最初はこの三つの尾根の堂塔全部を崇福寺と考えていました。ところが戦後福山敏男氏が、南の尾根を平安時代の初めに桓武天皇が滋賀の地に創建された梵釈寺の跡とし、北の二つの尾根が崇福寺であるとする新説を出されました。古い記録に見られる崇福寺の伽藍はすべて北方の二つの尾

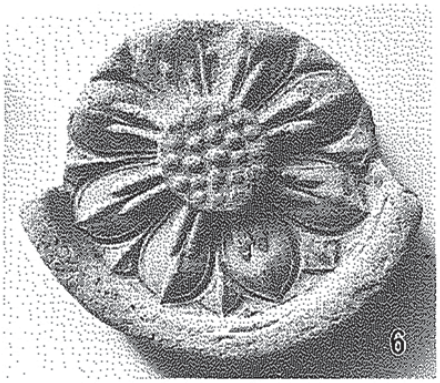

1

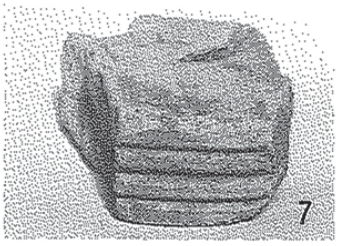
2

3

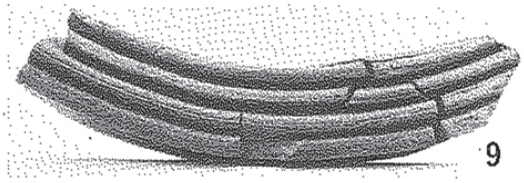

4

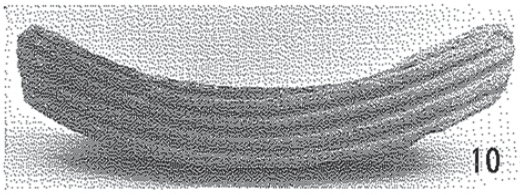
5

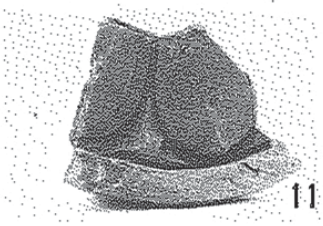

6

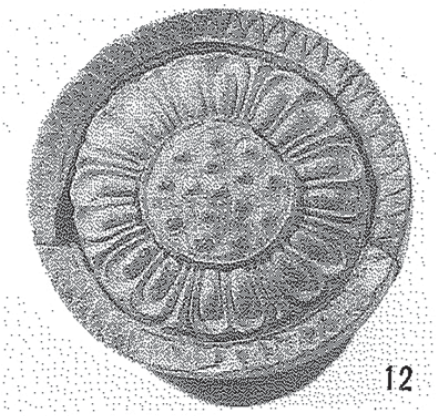

7

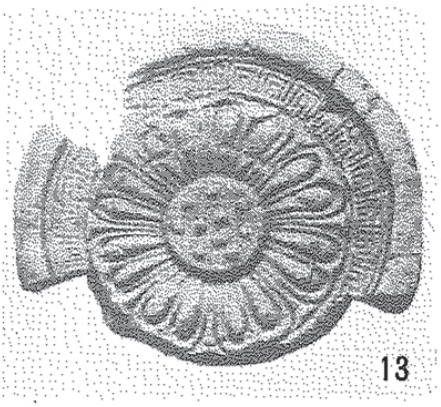
8

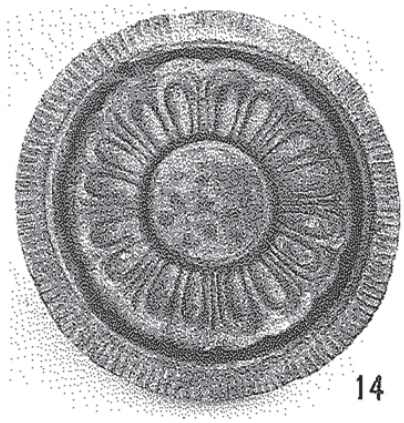

9

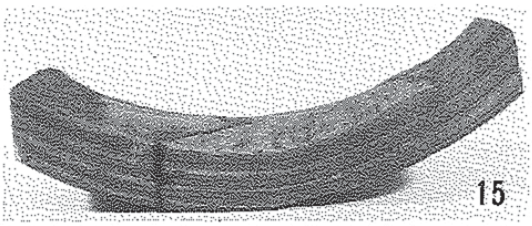

10

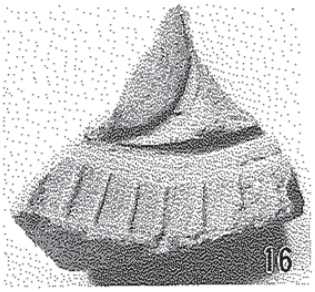

11

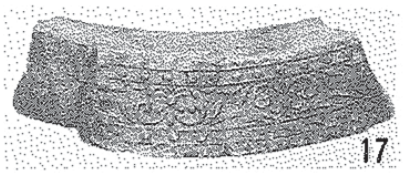

12


13


14

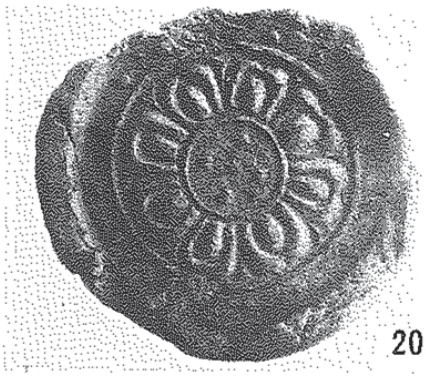

15

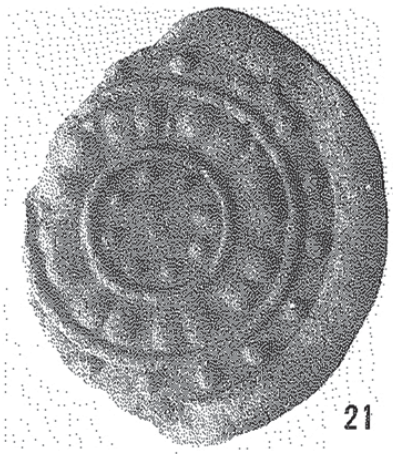

16


17

18

19

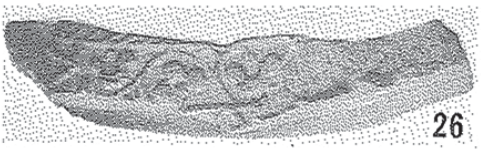

20


21

22

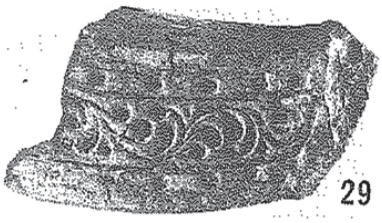
23

24

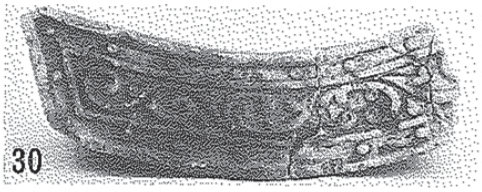

26

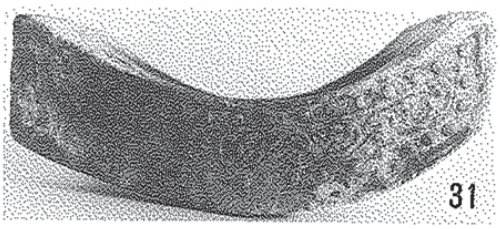
27

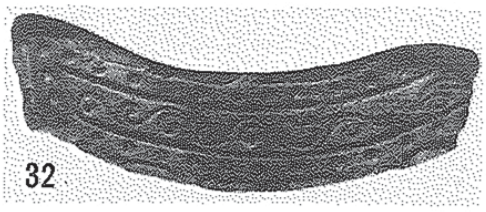
28

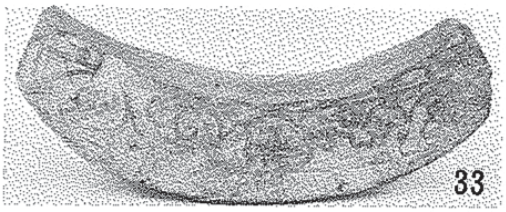

29

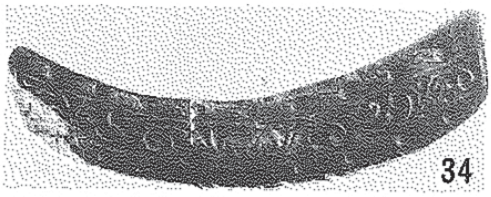
25

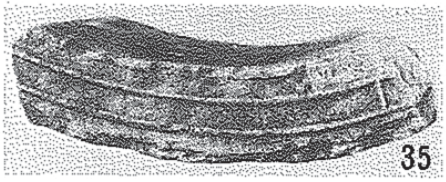

30


31


32


33


34


35

根の寺院跡でおさまりますから、この説は傾聴に値するものでしょう。ただしこのシリーズではこのような学説によって遺物を考えず、一応この三つの尾根出土の瓦を一括して崇福寺出土瓦として説明することとします。また、この文章では瓦の出土位置の細かい説明は省きました。なお、国の史跡指定でも、現在のところこの山中の遺跡全体を崇福寺跡としておりますので、このような概説文では一応一括して崇福寺としても許されることと思います。

まずここで注目されるのが、飛鳥の川原寺と同笵(どうはん)の複弁８葉軒丸瓦です(12)。南滋賀廃寺を中心に県下各地には多くの川原寺式の瓦が出土していますが、この瓦は川原寺の出土瓦と同笵のものです。このような川原寺と同笵の瓦は南滋賀廃寺でも発見されており、このことからこの両寺院が川原寺と密接な関係をもつものであることが推測されます。これと対をなす軒平瓦はここで発見されている四重孤文のものでしょう(15)。また、ここでは雷文縁の瓦が発見されています。これは蓮子が３＋７のもので、同じ雷文縁でも湖東日野川流域の宮井廃寺で見られるものと異なり、京都の北白川廃寺や大宅廃寺と同系統のもので、これは恐らく北白川廃寺のものと同笵と思われます(13)。さらにここでは南滋賀廃寺でも見られる複弁８葉で輻線文縁をもつ珍しい瓦が発見されています。これは中房部分が極端に凹んで内区と外縁の間に深い溝があるのが特長です(14)。同じ輻線文縁ですが、素弁のもので南滋賀廃寺や穴太廃寺でも見られるものと同系と見られるものの小破片が１個南の尾根の谷筋で発見されています(16)。ただしこれは小学生が拾ったものですから、出土の正確な位置は不明です。次に、滋賀県史蹟調査報告第10冊に載せられている軒平瓦の中に、他にほとんど類例を見ないものがあります。写真にその３種を示しましたが（17、26、27)、これらの瓦の時代ははっきりしないようです。前述の報告書によれば(17)の軒平瓦は一応奈良時代のものとみています。

最初にも述べましたように、崇福寺の寺院跡に近く長尾瓦窯がありますが、この窯で焼いた瓦としては次の一対があります。複弁８葉の軒丸瓦は、柴田實氏の報告では「弁の形はむしろ梅花に似ている」と述べられているもので、間弁は太く、その先端は短かく左右に分れており、中房は比較的大きくて、蓮子は１＋６計７個です。これを素文縁が囲んでいます(18)。これに対し軒平瓦は均斉唐草文で、外区には珠文が疎に並んでいます。唐草は比較的単純なものが３転しており、中心飾りもあまり数例のないものです(30)。なお、この長尾瓦窯では、南滋賀廃寺出土の白鳳時代や奈良時代の瓦が窯体の中などに出ていることを付説しておきましょう。次に、この地の尾根の一つ丸山で多く出土しているものがあります。柴田實氏の報告ではその他と異なる文様について述べられ、複弁８葉の軒丸瓦は、中房が正円でなく、弁の形も特殊な輪郭をなしており(24)、唐草文軒平瓦も写真(26)から脱化したもので「うまごやし」のような三つ葉の唐草文と表現しておられるものです(33)。そしてこれについては、肥後和男氏の天喜５(1057)年再建の際のものとされた説を支持しておられます。なお、これと同じもの

崇福寺跡出土鬼瓦
（京都淳和院跡出土品類似）

崇福寺跡出土鬼瓦片

崇福寺跡出土鬼瓦片

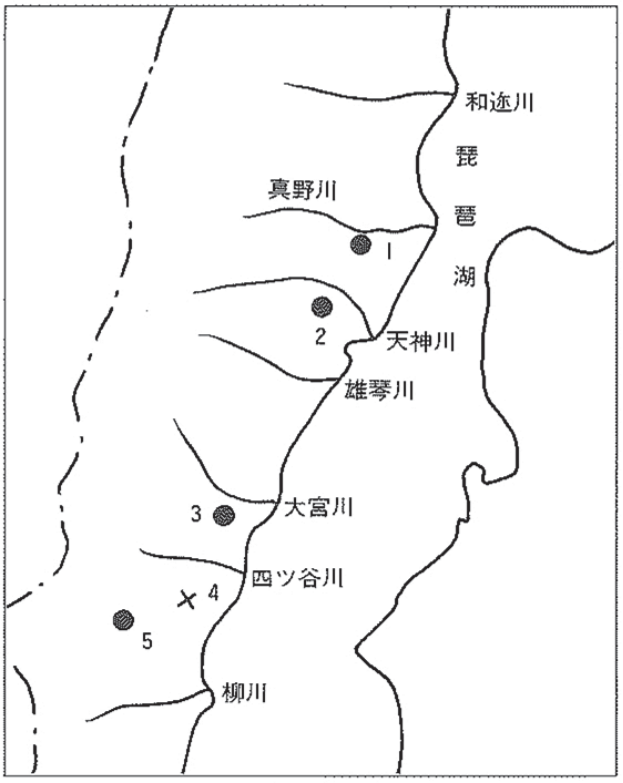
が石山寺鐘楼付近でも出土しています。このほか肥後和男氏の報告では多くの種類のものが報告されており、それらを写真で示しておきました（軒丸瓦の19～23、25、軒平瓦の28、29、31、32、34、35）。さらにこの寺院跡では鬼瓦の破片も出土しており、その一つは報告書にも指摘されているように京都市内の平安時代の遺跡から出土したものと同似のものであります。なお、長尾瓦窯では「南」の文字が陽刻された瓦が発見されました。この「南」が何を意味するのかは現在のところ不明です。

以上、大津市の北部、滋賀里以北の寺院跡出土瓦について述べました。崇福寺出土の瓦

長尾瓦窯出土瓦

については、大津市内の他の遺跡出土の瓦や、さらに京都などの瓦と同笵もしくはよく似たものがあり、これらと比較して考えてみる必要があります。したがって、広くこれらのものと一括して述べた方がよいのですが、紙幅の都合もあり、一応分割して説明しておりますので、引き続き述べるところの他の遺跡のものと比較してほしいと思います。

（西田　弘氏提供）



古瓦出土地位置図

1．真野廃寺　2．衣川廃寺　3．坂本廃寺
4．穴太廃寺　5．崇福寺